Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-09

児童期・青年期の居場所の分類とその機能の検討 : 居場所感の要素による居場所の分類

西中, 華子
石本, 雄真

(Citation)
神戸大学発達・臨床心理学研究,16:32-41

(Issue Date)
2017-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041163

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041163

児童期・青年期の居場所の分類とその機能の検討
―居場所感の要素による居場所の分類―
A Study on classification and functions of "*Ibasho*"
―A Classification of "*Ibasho*" by components of "*Sense of Ibasho*"

西中　華子*・石本　雄真**

要約：本研究では，これまでの研究で1人の居場所であるとされてきた「私的居場所」と，他者と一緒にいる居場所であるとされてきた「社会的居場所」について，他者の有無の観点からではなく，必要とする居場所感の要素という観点から捉え直し，それらの功罪，特にひきこもりの原因となると危惧されてきた「私的居場所」の功罪について，児童期・青年期を対象に検討を行った。その結果，まず高校生の「私的居場所」とは必ずしも1人でいる居場所ではなく，「被受容感」が感じられるような関係性がもてる他者と一緒にいる居場所も含まれることが示唆された。さらにそれらの功罪について検討した結果，児童期・青年期を通して「私的居場所」の適応への否定的な影響はみられず，特に児童期においては学校適応および心理的適応に肯定的な影響を直接的に及ぼすことが明らかにされた。中学生においても「私的居場所」は「社会的居場所」を介して適応に肯定的な影響を与えることが明らかにされ，「私的居場所」をもつことの有効性が明らかにされた。また「社会的居場所」は児童期・青年期を通して適応に有効であることが明らかにされ，先行研究の結果を支持するものとなった。

キーワード：居場所感　私的居場所　社会的居場所　児童期　青年期

問題と目的

1. 心理学における居場所の分類に関する研究・論考

心理学における居場所の先行研究では，居場所には種類があるとし，居場所の分類を試みているものがみられる。藤竹（2000）は居場所を「自分が他人によって必要とされ」，「自分の資質や能力を社会的に発揮することができ」，集団における「自分のポジションを明確にできる」居場所である「社会的居場所」と，「安らぎを覚えたり，ほっとすることができ」，「人間が自分自身であることを実感できる」居場所である「人間的居場所」とに大別している。加えて，持続的に居場所を得るためには「この場所こそは自分をまるごと受け入れてくれると自信をもって言うことのできる」「永続的居場所」として，これらの居場所を認知する必要があると論じている。つまり「社会的居場所」で得られる「居場所感」とは，自分の能力が認められ，必要とされる関係性の実感であり，一方の「人間的居場所」で得られる「居場所感」とは，安心できる感覚や，ありのままの自分でいられる感覚であると理解できる。さらにどちらの居場所も，いつでも自分のありのままを受け入れてくれる関係性の実感が得られる場合に，真の居場所である「永続的居場所」として規定されると理解される。同様に安齋（2003）も居場所を，「居られない場から逃げ出し立ち止まって心の安定を図る場」である「後ろ向きな居場所」と「自分の自己像を修正し自立していく場としての『居場所』であり，その先にはいきいきと自己発揮することが予測されている」居場所である「前向きな居場所」に分類している。このように藤竹（2000）や安齋（2003）では，「居場所感」が実感できる場を「居場所」と捉え，その場で感じられる「居場所感」の種類によって「居場所」を2種類に分類しているといえる。

さらに藤竹（2000），安齋（2003）と類似した分類として，「他人からの監視・干渉を避け，精神的な疲れを回復し，自分を取り戻す」「逃避・回復の場所」である「私的居場所」と，「自分を確認し，自由に自分を表現でき」，「安心して人や社会との関係性をもてる場所」である「公的居場所」を挙げた中島（2003）や，「一人になって自分を取り戻せる場所」である「個人的居場所」と「人と関わりをもち自分を確認できる場所」である「社会的居場所」を挙げた中島・倉田（2004）がみられる。居場所の展望論文では，藤竹（2000），安齋（2003），中島（2003），中島・倉田（2004）の分類すべてを，「人との関わりの有無」による分類と考察しているものが多い（石本，2009；杉本・庄司，2007など）。確かに中島（2003）や中島・倉田（2004）の分類は，文脈から，1人でいるか他者と一緒にいるかという他者との関わりの有無による分類と判断することもできる。一方で藤竹（2000）は「人間的居場所」の規定要因に，自分以外の

＊神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程
＊＊鳥取大学教員養成センター

人間がいるかいないかは関係がないと明言しており，「愛する配偶者」といった「“他人”ではない」者と一緒にいる居場所もここに含まれる，としている。つまりここでは居場所を単純に「他者の有無」により分類しているのではなく，側にいる他者や身を置いている空間を含んだその「場」を，個人がどのように認知しているかにより居場所を分類していると考えられ，個人の主観すなわち「居場所感」の種類による分類であると捉える方が妥当であろう。このように居場所を複数の種類に分類している心理学的論考においても，居場所を個人の主観である「居場所感」の側面から捉えていると理解することができる。

他方居場所を個人の主観だけではなく，「客観的条件」という視点を加えて分類を試みているもの（住田，2004）もみられる。ここでは居場所が形成されるためには3つの条件が必要であるとされ，①物理的な空間，②その空間における他者との関係性，③その関係性に対する個人の認知が挙げられている。そして①物理的空間，および②他者との関係性，を「客観的条件」，③関係性に対する個人の認知を「主観的条件」とし，この③関係性に対する個人の認知である「主観的条件」が，居場所を規定する第一条件であるとされている。その上で，「客観的条件」にはその空間に単純に他者がいるかどうかという「空間性」と，「自分を受け入れてくれる」他者がいるかどうかという「関係性」の2軸が存在するとし，それぞれの軸の対極を社会的—個人的と設定し，居場所をⅠ～Ⅳ型の4つに分類している。この分類によると，Ⅰ型は学校などの，他者の存在する空間において，自分を受け入れてくれる関係性が存在する居場所であり，住田（2004）はこの居場所がいわゆる望ましい居場所であると位置づけている。Ⅱ型は受け入れてくれる他者の存在する個人的な空間であり，例えば仲間と自宅にこもって遊ぶといった，居場所感を感じられる他者との緊密で閉鎖的な居場所といえる。Ⅲ型は他者の存在しない個人的な空間であり，1人で自室にいる状態などであるとされている。Ⅳ型は，周囲に他者は存在するが，親密な仲間を持つことができていない状態で，ゲームセンターなどに入り浸っている者を指すとされている。以上をまとめると，ここで「居場所感」に相当するものは関係性に対する個人の認知である「主観的条件」であると考えられ，そこに客観的な条件の2軸を加えた図式で居場所を分類しているといえる。

しかしながらこの分類の問題点としてまず，「関係性に対する個人の認知」である「主観的条件」と，「客観的条件」における②他者との関係性すなわち「『自分を受け入れてくれる』他者がいるかどうかという『関係性』」との相違が明確でない点が挙げられる。ここでいう「受け入れてくれる関係性があるかどうか」とは結局のところ「『受け入れられている』という個人の主観的な認知があるかどうか」により規定されると考えられ，そうであるならば，これは主観的に規定されるものであり，「客観的条件」とすること自体が疑問である。

さらにもう1つの客観的条件である①物理的な空間，すなわちその空間に単純に他者がいるかどうかという軸における分類においても，その内容に疑問が残る。具体的に住田（2004）は，他者の存在しないⅢ型の居場所，例えば「1人で自室にいる状態」に関して，Ⅲ型の居場所のみを居場所としている場合を「自分の部屋しか居場所がない」という状態であり，望ましい居場所を得ている状態ではないとしている。一方でⅢ型とⅠ型といったように複数の居場所をもっている場合は「自分の部屋も居場所である」という状態であり，望ましい居場所を得ている状態だと判断している。確かに「自分の部屋しか居場所がない」という状態は，主観的に「居場所がある」状態ではないと想像され，望ましい居場所を得ている状態ではないといえるだろう。むしろ「どこにも居場所がない」から「甘んじて自室を居場所としている」状態であるとも予想され，これを居場所の分類に含めて論じること自体に無理があると考えられる。一方で，たとえⅢ型の居場所である「自分の部屋に1人で居る状態」のみを居場所としていたとしても，上述したような「自分の部屋しか選択肢がないため甘んじてそこを居場所としている」状態なのか，「あえて今は自分の部屋を居場所として選択している」状態なのかでは意味合いが異なるが，住田（2004）のいう「複数の居場所をもっているかどうか」という基準でこれを判別することはできないだろう。なぜなら1人の状況だけを居場所として選択している状態であっても，あえてその場を居場所として選択し，その状況において「居場所がある」と感じており，何らかの適応的な効果を得ている可能性も考えられる。そのため1人の状況だけを居場所として選択していることそれ自体が「居場所がない」状態に直結するとは限らないと予想されるからである。このように他者がいない1人の状況を居場所として選択していることを不適応的であるとかひきこもりにつながるというように論じている研究は他にもみられるものの（若山，2001；山岡，2002），居場所として選択した状況に他者がいるかどうかで居場所を分類し，他者がいない状況だけを居場所として選択していることを，すなわち不適応的であると単純に結びつけることには疑問が残る。

この住田（2003）に類似する分類として，居場所を「個人の意識」（自己評価）と「他者の目から見たという意味での社会的な位置づけ」（社会性）を軸に，それぞれのズレという視点から居場所を分類している三本松（2000）が挙げられる。ここでいう「個人の意識」とは，個人が主観的にその場を「居場所である」と感じているかどうかという軸であり，「社会的な位置づけ」とは，個人の主観とは離れて，他者がその人の居場所としてその場をふさわしいとみなしているかどうかという軸であり，概ね他者が存在するかどうかということと同義と言える。ここでいう「個人の意識」が居場所を規定する個人の主観であり，「居場所感」であると理解される。さて，ここで論じられている「自分の中の居場所」も，上述した住田（2004）のⅢ型の居場所同様1人でいる居場所であるが，三本松（2000）は，たとえ自分1人の環境だからといって必ずしも孤独ではないとしており，この場を主体的に選択して居場所としている場合，孤独を楽しんでいる可能性もあると論じている。一方ここで挙げられている「他者からみた居場所」とは，他者からはその人にとって相応しい場であるとの評価を受けているが，当の本人は「居場所がある」とは感じていない場である。ここではこの場も居場所のひとつとして挙げているが，先に論じたように，居場所を規定するのは個人の主観である「居場所感」を感じているか否かである，という立場に立つならば，この場は居場所ではないことになる。「自分の知らない自分の居場所というものは，決してない」（小沢，2000）とする説も存在するように，この場を居場所と捉えることには疑問が残る。さらにもう1つ挙げられている「孤立した状況」とは，「社会的認知も得られず」自分自身も居場所であると感じられていない場のこと

であり，この場は文字通り居場所ではない。この分類においても個人の主観に，「社会的な位置づけ」という客観的な視点が加えられているが，上述したように「他者からみた居場所」や「孤立した状況」といった，個人が「居場所がある」と感じられない場は，結局のところ居場所ではないと理解されるため，「社会的な位置づけ」すなわち他者の有無という視点を加えて居場所を分類し，捉えることの意義は明確でないといえる。

このような他者の有無による居場所の分類はこれまでの居場所研究においては一般的であるともいえ，1 人の居場所と他者のいる居場所における居場所の適応的効果の違いに関しては，実証的研究でも検討されている。石本（2010）は居場所を他者の有無により「個人的居場所」と「社会的居場所」に分類し，精神的健康および居場所感との関連を分析している。これによると，「個人的居場所」は精神的健康および居場所感とは関連せず，「社会的居場所」のみの関連が示されている。この結果より石本（2010)は，個人的居場所と社会的居場所は，同じ「居場所」という表現が用いられているものの異質のものであると考察している。さらに社会的居場所を居場所としていることは精神的健康を高めることにつながるが，個人的居場所を居場所としていることの有効性については明らかにできなかったとしている。この石本（2010)の結果に関して，まず，ここでは精神的健康の指標として心理的well-being 尺度を用いていることが結果に影響を及ぼしていると考えられる。自己有用感尺度の項目や，心理的 well-being 尺度の下位尺度における項目を概観すると，他者との関係を想定した項目が一定数みられる。このことが，他者を想定した居場所である「社会的居場所」とは相関し，他者を想定しない「個人的居場所」とは相関しない，という結果を導いたのではないかと推測される。また上述した居場所の分類において，個人的居場所に相当する居場所の機能とは，「居られない場から逃げ出し立ち止まって心の安定を図る場」（安齋，2003），「他人からの監視・干渉を避け，精神的な疲れを回復し，自分を取り戻す」「逃避・回復の場所」（中島，2003），「一人になって自分を取り戻せる場所」（中島・倉田，2004）などとされていることから，個人的居場所とはネガティブな状態からの回復のために必要とする居場所，またはネガティブな状態にある者が必要とする居場所であることが予想される。よってこのような視座のもと，精神的健康の指標や居場所感の構成要素を吟味の上，再検討する必要があると考えられる。さらに「個人的居場所」の捉え方について，石本（2010)の調査では個人的居場所を単純に「1 人でいる状況」や「他者と関わりをもっていない状況」と捉え，設定しているが，上でも論じたように，個人的居場所とは必ずしも物理的に 1 人でいる状況とは限らないのである。そのため調査対象者が個人的居場所としての機能を備えた居場所，例えば「精神的な疲れを回復できる」とか「他人からの監視・干渉を避けることができる」といった感覚がもてるような居場所をもっていたとしても，この調査内容では捉えきれていない可能性がある。よって居場所を単純に他者の有無で分類し，定義するのではなく，必要となる居場所感の種類が異なると仮定し，居場所を分類する方が妥当であると考えられる。

2. 本論文における居場所の定義と居場所の分類

以上のように，居場所を捉える上で，その場における他者の有無という視点を取り入れる意義については明確でないと言え，藤竹（2000），安齋（2003）のように，その場を個人が主観的にどう捉えているのかによって居場所を定義する方法が妥当であると考えられる。従って居場所とは個人の主観によって規定されると捉えることができ，言い換えると，個人が「居場所がある」と感じるために必要な感覚である「居場所感」を主観的に感じられる環境のことであるといえる。村瀬・重松・平田・高堂・青山・小林・伊藤（2000）は，居場所を「心の拠り所となる物理的空間や対人関係，もしくはありのままの自分で安心していられる時間を包含するメタファー」と定義しているが，本研究ではこれを参考に，「『居場所感』を感じられる，物理的空間や対人関係，時間や状況を含む『場』」を居場所と定義することとする。

さらに，居場所とは一義的なものではなくいくつかの種類に分類され，その分類の方法については，その場に対する個人の主観によって分類する方法が妥当である可能性についても上で論じた。具体的には居場所を個人の主観によって分類するにあたり，個人が主観的に居場所を規定する要因である「居場所感」の種類に応じて居場所を分類するという方法が考えられる。

なおこれまで概観してきた提言や論考においては，「居場所感」という名称は使用されていないものの，「居場所感」であると考えられる感覚がいくつか挙げられていた。具体的には，他者から個人として大切にされているという感覚（文部省，1992）能力を発揮できているという感覚，「自己存在感」，精神的に安心できる感覚（沖田，1994），安心できる感覚，「自己存在感」，「充実感」（文部科学省，2012），自分の気持ちを理解，尊重してくれ，ありのままを表現できる関係性の実感や，それに伴う自己肯定感や役割の実感（廣木，2005），自分が自分でいられる感覚（北山，1993），自分のありのままを受け入れてもらえる感覚，居心地のよさ，ホッと安心できる感覚（住田，2003），自分の能力が認められ必要とされる感覚，安心できる感覚，ありのままの自分でいられる感覚（藤竹，2000），心の安定を図ることができるか感覚，いきいきと自己発揮する準備ができる感覚（安齋，2003），他人からの監視・干渉を避けることができる感覚，精神的な疲れを回復し自分を取り戻せる感覚，自分を確認し自由に自分を表現できる感覚，安心して人や社会との関係性をもてる感覚（中島，2003），自分を取り戻せる感覚，人と関わりをもち自分を確認できる感覚（中島・倉田，2004）などである。ここでは，他者との関係性を前提としている感覚，自分の能力の発揮といったコンピテンスに関わる実感，精神的な疲れの回復といったリラックスの感覚，自分自身の内面について考える自己にまつわる感覚が，居場所感の要素と考えられるものとして挙げられているといえよう。さらに詳細に分類すると，他者との関係性を前提としている感覚のうち，他者から受け入れられている感覚を「被受容感」，他者の役に立っている感覚を「自己有用感」，コンピテンスに関わる実感のうち，自分自身の存在を実感できる感覚を「自己存在感」，いきいきと能力を発揮できる感覚を「充実感」，リラックスに関わる感覚のうち，ほっとしたり安心していられる感覚を「安心感」，他者から干渉されることがない感覚を「自由の確保」，自己にまつわる感覚のうち，ありのままでいられる感覚を「本来感」，自分自身について振り返ることができる感覚を「内省」とそれぞれ分類，命名することができると考えられる。

加えて，これらのカテゴリーを上述してきた居場所の分類にあて

はめると，「社会的居場所」（藤竹，2000）や「前向きな居場所」（安齋，2003），「公的居場所」（中島，2003），「社会的居場所」（中島・倉田，2004）といった，他者から必要とされ，能力を発揮できるような居場所における居場所感として，「被受容感」「自己有用感」「自己存在感」「充実感」「内省」が，「人間的居場所」（藤竹，2000）や「後ろ向きな居場所」（安齋，2003），「私的居場所」（中島，2003），「個人的居場所」（中島・倉田，2004）といった，ほっとでき，ありのままを実感できるような居場所における居場所感として,「本来感」「安心感」「自由の確保」が挙げられると考えられる。なお居場所の基底的要素として関係性がある，という主張（東，1999；住田，2004 など）がみられることから，「私的居場所」や「個人的居場所」は適応に有効な居場所ではないのではないかと論じている研究もみられるが（例えば石本，2009），これまで概観してきた居場所の定義や分類を鑑みると，居場所の基底的要素として関係性があるという主張は妥当であると考えられるものの，その意味するところがすなわち，適応に有効な居場所とは他者が存在する居場所である，と捉えるのは早計であると考えられる。

3．本論文の目的

以上において，居場所はその場を居場所とするために必要となる居場所感の種類に応じていくつかの種類に分類でき，それらはそれぞれ異なる機能を持つことについて論じてきた。本論文ではこのことに関して実証的に検討を加えることを第1の目的とする。先行研究を鑑みた結果，居場所の分類は具体的に，他者から必要とされ能力を発揮できるような居場所と，ほっとできありのままを実感できるような居場所の 2 つが考えられたが，本論文では前者を藤竹（2000）や中島・倉田（2004）を参考に「社会的居場所」と，後者を，中島（2003）を参考に「私的居場所」と名づけ，検討を行うこととする。またそれらの居場所が適応にどのような効果をもたらすのかについて検討を行うことを第2の目的とする。なおこれまでの心理学における居場所研究は，主に中学生から大学生までの青年期を対象として行われているものが多いが，本論文では青年期だけではなく，児童期にもその範囲を広げて検討を行うこととする。これは「居場所づくり」の実践が数多く行われている学校教育の分野では，小学生もその対象として定められていることや，「居場所」が議論される発端となった不登校の問題が，小学校高学年生の児童を中心に近年増加傾向にあり（文部科学省初等中等教育局児童生徒課，2015），児童期の子どもの中にも居場所を必要としている者が一定数存在すると考えられるからである。

方　法

1．調査対象者

兵庫県内の公立小学校 1 校の 4，5，6 年生合計 196 名（4 年生男子 34 名，女子 31 名，5 年生男子 28 名，女子 30 名，6 年生男子 39 名，女子 32 名，学年性別不明 2 名），兵庫県内の公立中学校 1 校および和歌山県内の公立中学校 1 校の 1，2，3 年生合計 479 名（1 年生男子 48 名，女子 49 名，2 年生男子 52 名，女子 56 名，3 年生男子 130 名，女子 138 名，学年性別不明 6 名），兵庫県内の公立高校 2 校の 2 年生合計 283 名（男子 152 名，女子 131 名），合計 958 名。このうち欠損値を含むなど回答に不備のあるものを除いた 769 名（小学生 142 名，中学生 371 名，高校生 256 名）の回答を分析の対象とした。有効回答率は 80.3%であった。

2．調査時期　2012 年 12 月～2014 年 7 月に実施した。

3．調査手続　教育関係者を通じて学校長および担任，教科担当の教員に依頼し，予め学校長の許可を得た上で，各学級にて集団で実施した。

4．調査内容

（1）フェイスシート　調査の趣旨の説明，個人の回答の秘匿，回答方法の説明が明記されており，さらに性別，学年の記入欄が設けられた。

（2）居場所感を測定する尺度（以下，多面的居場所感尺度）項目　これまでの居場所に関する心理学研究で用いられた「居場所感」およびそれに類するものを測定する尺度項目を参考にし，項目を設定の上，測定している内容に基づいて 12 のカテゴリーに分類を行った。その上で過不足のないようにそれぞれのカテゴリーに 4 項目を設定した（Table1）。普段の生活の中で，これらの項目の感覚を感じることが「まったくない（1 点）」～「いつもある（5 点）」の 5 件法で回答を求め，4 項目の平均値を得点として用いた。なおこれらの項目には「居場所」という言葉は含まれていない。

（3）居場所の有無を直接尋ねる項目　「居場所」という言葉を用いて居場所の有無を尋ねる項目であり，「居場所がないと感じる」と「私には居場所があると思う」の 2 項目を用いた。「まったくない（1 点）」～「いつもある（5 点）」の 5 件法で回答を求めた。

（4）自尊感情尺度　Rosenberg（1965）によって作成された Self-Esteem-Scale について，福岡県新生活推進部青少年アンビシャス運動推進室（2009）が小中学生向けに翻訳したもの。ただし，山本・松井・山成（1982）による邦訳版について，内容的に異質である（谷，2001）とされている項目 8 に対応する項目（もっと自分を尊敬できたらいいなと思う）を除いた 9 項目を用いた。評定は「とてもそう思う（5 点）」～「まったくそう思わない（1 点）」の 5 件法であった。

（5）抑うつ傾向尺度　Birleson（1981）によって作成された Children Depression Self-rating Scale（DSRS-C）の日本語版（村田・清水・森・大島，2009），「楽しみの減退」（6 項目），「悲哀感」（5 項目），「無気力」（2 項目），「活動性減退と身体症状」（2 項目）の計 15 項目のうち，学校関係者から倫理面に配慮し削除して欲しいとの要望があった 3 項目（項目 9. いじめられても自分で「やめて」と言える，項目 10. 生きていても仕方がないと思う，項目 13. 家族と話すのが好きだ）を削除した，計 15 項目を用いた。評定は「そんなことはない（1 点）」～「いつもそうだ（3 点）」の 3 件法であった。

（6）学校生活享受感尺度　古市・玉木（1994）によって作成された学校生活享受感尺度，10 項目を用いた。評定は「あてはまらない（1 点）」～「あてはまる（5 点）」の 5 件法であった。

結　果

1．小学生における居場所感の因子構造の確認および居場所の分類の検討

小学生の居場所において，居場所感の種類に応じ，「私的居場所」と「社会的居場所」に分類される可能性について検討するために，小学生の多面的居場所感尺度について確認的因子分析を行った。なお因子構造については西中（投稿中）を参考にした。モデルの適合

Table 1 居場所感項目群のカテゴリと項目

＜安心感＞	＜充実・達成感＞
安心する	何かをうまくやれたという気持ちになる
リラックスしている	いつも途中であきらめてしまう（R）
くつろぐことができる	目標を達成した満足感を感じる
いつも何かに追われているように感じる（R）	熱中できるものがある
＜自由の確保＞	＜自己有用感＞
自由を感じる	私がいないと周りのみんなが困ると思う
自分だけの時間がある	誰からも必要とされていない気がする（R）
自分の好きなようにすることができない（R）	自分が役に立っていると感じる
誰かに合わせなくてもよいと思う	自分に役割があると感じる
＜本来感＞	＜場との一致感＞
ありのままでいられる	居心地の悪さを感じる（R）
自分らしくいることができる	周りに溶け込んでいると感じる
今の自分は本当の自分ではないように感じる（R）	周りになじんでいると感じる
本当の自分を出すことができる	自分だけ浮いているように感じる（R）
＜被受容感＞	＜連帯感＞
自分の気持ちや考えをわかってもらえていると思う	同じ目標をもつ人がいる
私のことをいつも気にしてくれている人がいると思う	周りの人と一緒に同じ目標に向かって取り組んでいる
誰にもわかってもらえないような気がする（R）	同じ目標に向かう仲間がいると感じる
周りの人に受け入れられていると感じる	一緒にがんばろうと思える人がいる
＜高揚感＞	＜内省＞
わくわくする	自分を見つめなおすことができる
気持ちが沈む（R）	落ち着いて自分のことを考えられる
楽しい気持ちになる	自分の気持ちについて考える
いきいきしている	これまでのことを振り返る時間がある
＜成長感＞	
成長しているように感じる	
自分の力が伸びていると感じる	
今やっていることが将来のためになると感じる	
自分が成長していないように感じる（R）	

Rは逆転項目

度指標が基準に達しなかったため，修正指標等を参考にパスを引き直し，再度分析を行った。その結果，適合度指標は GFI=.892，AGFI=.850，CFI=.962，RMSEA=.043 となり，RMSEA の値から概ね許容できる範囲であると判断した。そこでその後，さらに「社会的居場所」と「私的居場所」を潜在変数として設定し，「社会的居場所」から「充実感」「連帯感」「成長感」へ，「私的居場所」から「リラックス」へパスを引いたモデルを作成した。このモデルを用いて高次因子分析を実施した結果，モデルの適合度指標が基準に達しなかったため，修正指標等を参考にパスを引き直し，再度分析を行った。最終的に得られたモデルにおける測定方程式の因果係数は.20～1.00 であり，すべて 5%水準から 0.1%水準で有意であった。モデルの適合度指標は GFI=.875，AGFI=.835，CFI=.931，RMSEA=.056 であり，GFI および AGFI が.90 を下回っており，RMSEA も.05 を上回っていることから，あまりあてはまりの良いモデルであるとはいえないものの，CFI は.90 を上回っていること，および安定的な評価の指標であるとされる RMSEA（小塩，2008）が.10 を下回っていることから，あえて以降の分析に用いることとした。さらにこれらの結果をもとに，「社会的居場所」と「私的居場所」のそれぞれが適応にどのように影響を与えるのかを検証するために，「私的居場所」から自尊感情，抑うつ，学校適応へ，「私的居場所」から「社会的居場所」を介して「自尊感情」へパスを引き，共分散構造分析を行った（Figure1）。その結果モデルの適合度指標は GFI=.854，AGFI=.814，CFI=.933，RMSEA=.054 となった。最終的に得られたモデルの適合度について，やや貧弱な値であるものの，小学生の居場所の特徴についてある程度の示唆を得ていると判断し，考察の対象とすることとした。以上の結果より小学生の居場所は，重視される居場所感に応じて，「社会的居場所」と「私的居場所」に分類されると考えられ，「私的居場所」は「社会的居場所」を介し，自尊感情へと肯定的な影響を及ぼす可能性が，さらに「私的居場所」は直接的に自尊感情および学校適応へと肯定的な影響を及ぼし，抑うつを抑制すると示唆された。

2．中学生における居場所感の因子構造の確認および居場所の分類の検討

中学生においても小学生と同様の手順で分析を行った。まず確認的因子分析を繰り返した結果，最終的に適合度指標は GFI=.854，AGFI=.822，CFI=.914，RMSEA=.05 となり，あまり当てはまりの良いモデルとはいえないものの，小学生と同様，以降の分析に用いることとした（Figure2）。その後も小学生と同様の手順で分析を行い，「社会的居場所」と「私的居場所」を潜在変数とし，「社会的居場所」から「居心地の良さ」「被受容感」「連帯感」「内省」へ，「私的居場所」から「リラックス」「本来感」へパスを引いたモデルの検証を行った。最終的に得られたモデルにおける測定方程式の因果係

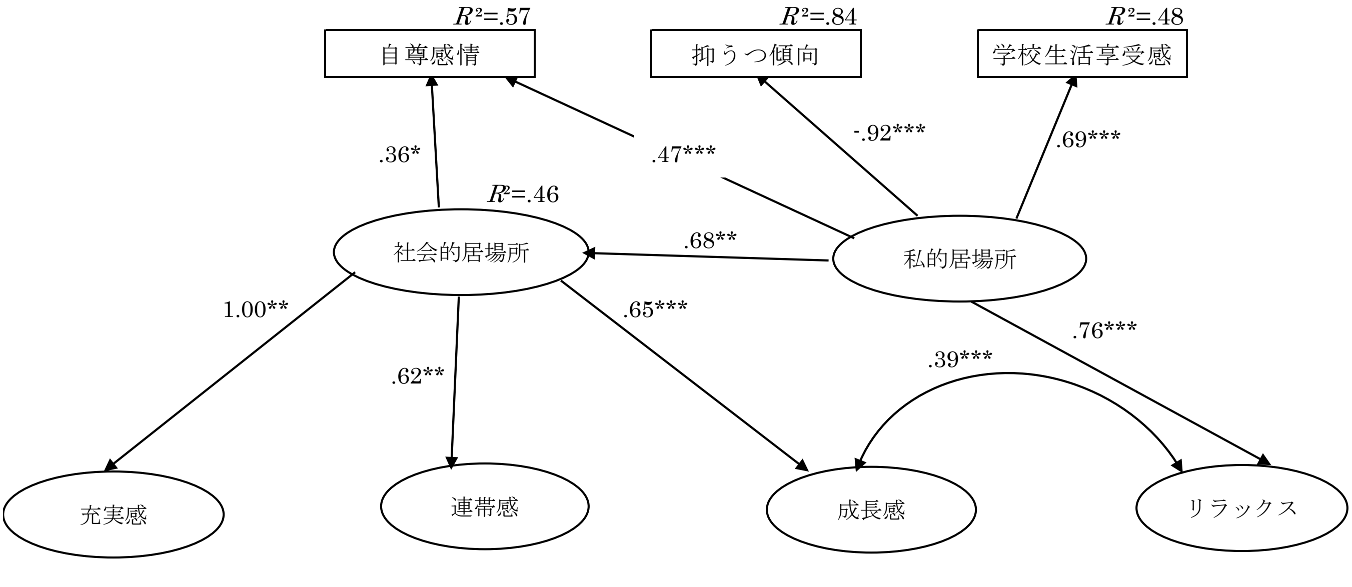

Figure 1. 小学生の居場所の構造および適応へ及ぼす影響のモデル（誤差項は省略）。

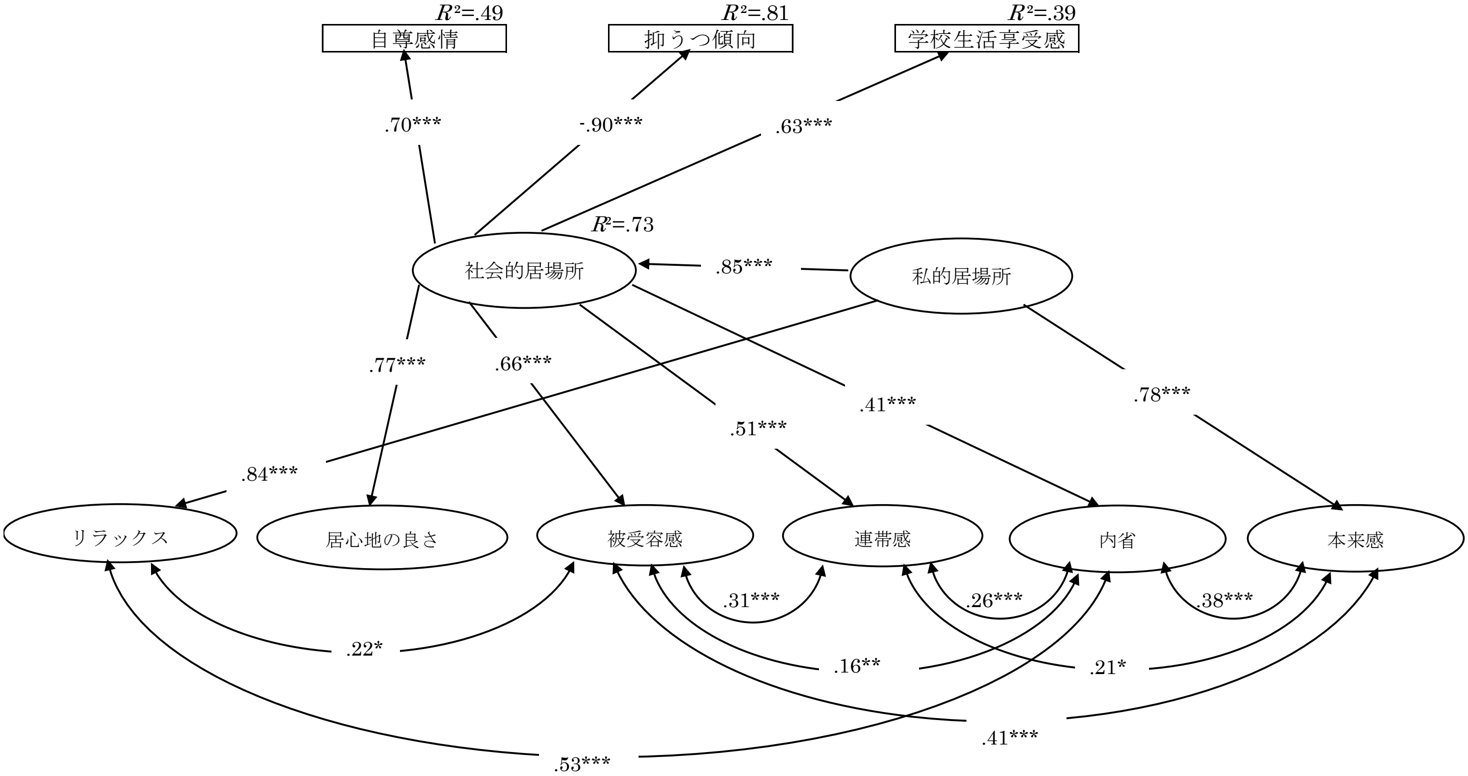

Figure 2.　中学生の居場所の構造および適応へ及ぼす影響のモデル（誤差項は省略）。

数は.12〜.85 であり，すべて 5%水準から 0.1%水準で有意であった。モデルの適合度指標は GFI=.853，AGFI=.823，CFI=.913，RMSEA=.057 であった。さらにこれらの結果をもとに，「社会的居場所」と「私的居場所」のそれぞれが適応にどのように影響を与えるのかを検証するために，小学生と同様の手順で共分散構造分析におけるモデルの検証を行った。その結果，最終的に「私的居場所」から自尊感情，抑うつ，学校適応へ，「私的居場所」から「社会的居場所」を介して「自尊感情」へパスを引いたモデルが得られた（Figure3-4）。モデルの適合度指標は GFI=.839，AGFI=.810，CFI=.908，RMSEA=.056 となったが，中学生の居場所の特徴についてある程度の示唆を得ていると判断し，あえて考察の対象とすることとした。以上の結果より中学生の居場所は，重視される居場所感の種類に応じて「社会的居場所」と「私的居場所」の 2 つに分類されることが示唆され，「私的居場所」は「社会的居場所」を介し，適応へと影響を及ぼすことが明らかにされた。

3. 高校生における居場所感の因子構造の確認および居場所の分類の検討

高校生においても小・中学生と同様の分析を行った。まず確認的因子分析を繰り返した結果，最終的に適合度指標は GFI=.841，AGFI=.805，CFI=.916，RMSEA=.059 となり，以降の分析に用いることとした。その後，さらに「社会的居場所」と「私的居場所」を潜在変数として設定し，「社会的居場所」から「被受容感」「連帯感」「成長感」へ，「私的居場所」から「リラックス」「本来感」へパスを引いたモデルを作成した。最終的に得られたモデルにおける測定方程式の因果係数は.17～.90 であり，すべて 5%水準から 0.1%水準で有意であった。モデルの適合度指標は GFI=.824, AGFI=.789, CFI=.901, RMSEA=.063 であり，以降の分析に用いることとした。これらの結果をもとに，「社会的居場所」と「私的居場所」のそれぞれが適応にどのように影響を与えるのかを検証するために，小・中学生と同様の分析を行った。最終的に「私的居場所」から自尊感情，抑うつ，学校適応へ，「私的居場所」から「社会的居場所」を介して「自尊感情」へパスを引いたモデルが得られ，適合度指標は GFI=.792，AGFI=.755，CFI=.880，RMSEA=.067 となった。最終的に得られたモデルについては，あまりあてはまりの良いモデルであるとは言えず，高校生の「私的居場所」と「社会的居場所」それぞれの功罪についての明確な示唆が得られたとは言えない結果であった（Figure3）。以上の結果より高校生の居場所は，重視される居場所感の種類に応じて「社会的居場所」と「私的居場所」の２つに分類されることが示唆され，「私的居場所」は直接的に抑うつ傾向を防御し，学校適応を高め，さらに「社会的居場所」を介し，自尊感情および学校適応を高め，抑うつを防御することが示唆されたが，モデルの適合度の観点から，明確な示唆であるとはいい難い結果となった。

考察と今後の課題

以上の結果より，小学生の居場所はリラックスできる居場所である「私的居場所」と，生き生きと能力を発揮でき，自身の成長について実感でき，共にがんばる仲間がいる「社会的居場所」とに分類されることが示唆され，「私的居場所」は「社会的居場所」を介し，自尊感情へと肯定的な影響を及ぼすことが，さらに「私的居場所」は直接的に自尊感情および学校適応へと肯定的な影響を及ぼし，抑うつを抑制することが示された。中学生の居場所は，リラックスできてありのままでいられる「私的居場所」と，その場において浮くことなく，自分を受け入れ必要としてくれたり，共に目標に向かえるような対人関係がもて，自分自身を振り返りみつめることができるような居場所である「社会的居場所」に分類されると明らかにされ，「私的居場所」は「社会的居場所」を介し，自尊感情や学校適応を高めたり抑うつを抑制したりすることが示唆された。高校生の居場所は，リラックスできてありのままでいられ，自分を受け入れてくれる対人関係がもてるような「私的居場所」と，自分の成長を実感でき，共に目標に向かって努力する関係性や自分を必要としてくれる関係性を築き，自分を振り返りみつめることができる「社会的居場所」とに分類されることが示されたが，これらの功罪については明確な示唆が得られなかった。先行研究においては「私的居場所」を 1 人でいる居場所と同義と捉えているものがみられるが（石本，2009；杉本・庄司，2007），ここでの結果において，高校生の「私的居場所」には対人関係にまつわる居場所感が含まれていることから，「私的居場所」とは必ずしも 1 人でいる居場所を指すわけではないことが示された。藤竹（2000）は「人間的居場所」の規定要因に，自分以外の人間がいるかいないかは関係がなく，「愛する配偶者」といった「“他人” ではない」者と一緒にいる居場所もここに含まれる，と論じているが，ここでの結果はこれを裏付けるものであるといえよう。また，すべての学校段階において居場所は必要とする居場所感に応じて，「私的居場所」と「社会的居場所」に分類される可能性が示唆され，小学生においては特に，「私的居場所」が適応へと肯定的な効果を示すことが，さらに中学生においても間接的にではあるものの，適応的な効果を発揮することが示されたといえよう。

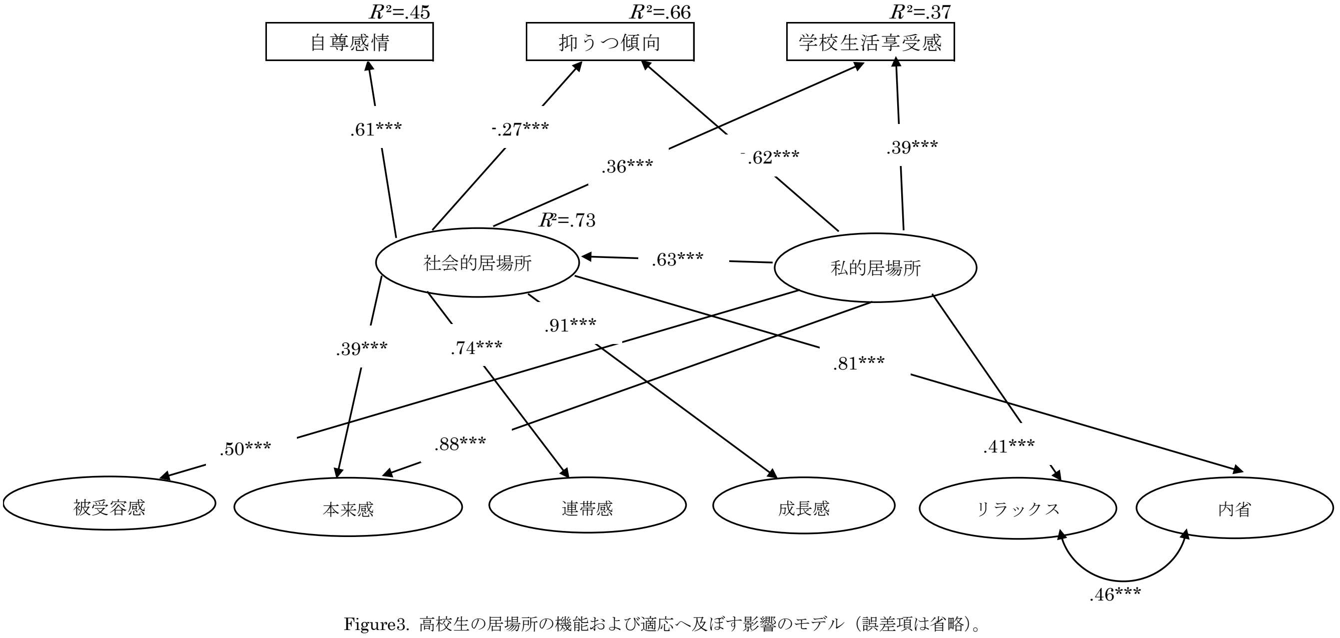

Figure3. 高校生の居場所の機能および適応へ及ぼす影響のモデル（誤差項は省略）。

若山（2001）や山岡（2002）は，他者がいない 1 人の状況を居場所として選択していることは不適応的であり，ひきこもりにつながる可能性をはらんでいると論じており，さらに石本（2010）においては「社会的居場所」は適応へと関連するが，「私的居場所についてはその効果が不明であると結論づけている。本論文における結果より，小中学生においては「社会的居場所」のみならず，「私的居場所」の適応的な効果について一定程度明らかにされ，若山（2001）や山岡（2002）が主張するような，「私的居場所」の否定的な側面については見出されず，むしろ肯定的な効果を発揮する居場所であることが示された。また住田（2004）は，私的な居場所のみを居場所としている場合を望ましい居場所を得ている状態ではないとし，私的な居場所と社会的な居場所の両方を得ている状態が，望ましい居場所を得ている状態だとしている。このことについて，中学生においては「私的居場所」は直接的には適応へと影響を及ぼさず「社会的居場所」を介していることから，「私的居場所」から「社会的居場所」へと段階的に居場所を得ている可能性があり，結果的に複数の居場所をもっている状態が適応へと影響を及ぼしていると考えられた。つまり住田（2004）の主張を一部支持しているものと考えられるが，住田（2004）では 1 人の居場所のみをもっている状態は「居場所がない」状態につながるとの主張もみられることから，1 人の居場所と「居場所がない」状態の関連についても示唆を得る必要があると考えられ，今後検討していく必要があろう。加えて高校生においては「私的居場所」と「社会的場所」の功罪について明らかにすることができず，小・中学生のモデルについても適合度が十分であるとはいえない部分がみられたため，再調査および再検討の余地があるといえる。

引用文献

安齋智子 (2003).「居場所」概念の変遷　発達，**96**，33-37.

東　宏行 (1999).「居場所」づくりに内在する論理の錯綜－「居場所」という呪文に消去される「関係」（特集・子どもの生活）　子どもの文化，**31**，40-49.

福岡県生活推進部青少年アンビシャス運動推進室(2009). 平成 20 年度自尊感情結果について（報道資料）

古市裕一・玉木弘之 (1994). 学校生活の楽しさとその規定要因　岡山大学教育学部研究集録, **96**, 105-113.

藤竹　暁. (2000). 居場所を考える. 藤竹　暁（編），現代人の居場所（現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ 3），47-57. 東京：至文堂

廣木克行. (2005). 臨床教育（Clinical Education）─子どもの居場所をつくる─. 神戸大学発達科学部編集委員会（編），キーワード 人間と発達，106-107. 岡山：大学教育出版

石本雄真 (2009). 居場所概念の普及およびその研究と課題　神戸大学大学院人間発達環境額研究科 研究紀要，**3**，93-100.

石本雄真 (2010). こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所─精神的健康および本来感，自己有用感との関連から，カウンセリング研究，**43**，72-78.

北山　修. (1993). 自分と居場所. 東京：岩崎学術出版社.

文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2015). 平成 26 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について（報告書）

文部科学省生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室 (2004). 子どもの居場所づくり 地域子ども教室推進事業の実施にあたって　教育委員会月報，**56**，2-25.

村瀬嘉代子・重松正典・平田正子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文 (2000). 居場所を見失った思春期・青年期の人びとへの統合的アプローチ ─通所型中間施設のもつ治療・成長促進的要因─　心理臨床学研究，**8**，221-232.

村田豊久・清水亜紀・森陽二郎・大島祥子 (1996). 学校における子どものうつ病－Birleson の小児期うつ病スケールからの検討－　最新精神医学，**1**，131-138.

中島喜代子 (2003). 中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」　三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学　**54**，125-136.

中島喜代子・倉田英理子 (2004). 家庭，学校，地域における子どもの居場所　三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学，**55**，65-77.

小塩真司 (2008). はじめての共分散構造分析. 東京：東京図書

小沢一仁 (2000). 自己理解・アイデンティティ・居場所　東京工芸大学工学部紀要（人文・社会編），**23**，94-106.

Rosenberg，M.（1965). Society and the adolescent self−image. Princeton：Princeton University Press.

三本松政之 (2000). 高齢者の居場所─新しい福祉のあり方. 藤竹　暁（編），現代人の居場所（現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ 3），193-203. 東京：至文堂

杉本希映・庄司一子 (2007). 子どもの「居場所」研究の動向と課題　カウンセリング研究, **40**, 81-91.

住田正樹. (2003). 子どもたちの「居場所」と対人的世界. 住田正樹・南　博文（編），子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在，3-17. 福岡：九州大学出版会

住田正樹. (2004). 子どもの発達と子どもの居場所（特集 子どもたちの居場所づくり）　青少年問題，**51**，10-15.

谷　冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造－多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成－　教育心理学研究, **43**, 265-273.

富永幹人・北山　修. (2003).青年期と「居場所」. 住田正樹・南　博文（編），子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在, 381-400. 福岡：九州大学出版会

若山　隆 (2001). こころとからだの在るところ─私たちの居場所の問題　現代と文化，**105**，67-82.

山岡俊英. (2002). 大学生の居場所とセルフエスティームに関する一研究　佛教大学教育学部学会紀要，**1**，137-167.

Appendix1 小学生居場所感尺度の項目

項　　目
第Ⅰ因子　充実感　（α＝.82）
5ありのままでいられる
6いきいきしている
4何かをうまくやれたという気持ちになる
11安心する
18周りになじんでいると感じる
33自分が役に立っていると感じる
第Ⅱ因子　連帯感　（α＝.81）
28同じ目標に向かう仲間がいると感じる
14同じ目標をもつ人がいる
15周りの人と一緒に同じ目標に向かって取り組んでいる
27自分に役割があると感じる
第Ⅲ因子　成長感　（α＝.74）
41自分の力が伸びていると感じる
40これまでのことを振り返る時間がある
24成長しているように感じる
第Ⅳ因子　リラックス（α＝.67）
43自由を感じる
19自分の好きなようにすることができない
36リラックスしている
20気持ちが沈む
21いつも何かに追われているように感じる

Appendix2 中学生居場所感尺度の項目

項　　目
第Ⅰ因子　リラックス　（α＝.90）
37自分だけの時間がある
36リラックスしている
17くつろぐことができる
43自由を感じる
22わくわくする
12楽しい気持ちになる
38熱中できるものがある
11安心する
第Ⅱ因子　居心地の良さ　（α＝.82）
39誰にもわかってもらえないような気がす
32自分だけ浮いているように感じる
31居心地の悪さを感じる
21いつも何かに追われているように感じる
20気持ちが沈む
34自分が成長しているように感じる
45誰からも必要とされていない気がする
第Ⅲ因子　被受容感　（α＝.85）
10周りに溶け込んでいると感じる
9 周りの人に受け入れられていると感じる
18周りになじんでいると感じる
2 私がいないと周りのみんなが困ると思う
27自分に役割があると感じる
42自分の気持ちや考えをわかってもらえていると思う
7 私のことをいつもきにしてくれている人がいると思う
第Ⅳ因子　連帯感　（α＝.90）
15周りの人と一緒に同じ目標に向かって取り組んでいる
14同じ目標をもつ人がいる
28同じ目標に向かう仲間がいると感じる
30一緒にがんばろうと思える人がいる
第Ⅴ因子　内省　（α＝.72）
29落ち着いて自分のことを考えられる
40これまでのことを振り返る時間がある
16自分を見つめなおすことができる
24成長しているように感じる
第Ⅵ因子　本来感　（α＝.86）
1 自分らしくいることができる
5 ありのままでいられる
13本当の自分を出すことができる
6 いきいきしている

Appendix3　高校生居場所感尺度の項目

項　　目
第Ⅰ因子　被受容感　（α＝.87）
10周りに溶け込んでいると感じる
18周りになじんでいると感じる
9 周りの人に受け入れられていると感じる
31居心地の悪さを感じる
45誰からも必要とされていない気がする
39誰にもわかってもらえないような気がす
第Ⅱ因子　本来感　（α＝.86）
5 ありのままでいられる
1 自分らしくいることができる
13本当の自分を出すことができる
3 今の自分は本当の自分ではないように感じる
11安心する
6 いきいきしている
第Ⅲ因子　連帯感　（α＝.91）
15周りの人と一緒に同じ目標に向かって取り組んでいる
14同じ目標をもつ人がいる
28同じ目標に向かう仲間がいると感じる
30一緒にがんばろうと思える人がいる
第Ⅳ因子　成長感　（α＝.74）
41自分の力が伸びていると感じる
24成長しているように感じる
4 何かをうまくやれたという気持ちになる
33自分が役に立っていると感じる
35目標を達成した満足感を感じる
44今やっていることが将来のためになると感じる
34自分が成長しているように感じる
第Ⅴ因子　内省　（α＝.79）
40これまでのことを振り返る時間がある
16自分を見つめなおすことができる
25自分の気持ちについて考える
29落ち着いて自分のことを考えられる
第Ⅵ因子　リラックス　（α＝.79）
37自分だけの時間がある
17くつろぐことができる
36リラックスしている
43自由を感じる